



Title	ドイツ語から見たゲルマン語 (8) : 不定詞と分詞
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 167, 1(左)-30(左)
Issue Date	2022-07-19
DOI	10.14943/bfhhs.167.11
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/86531">http://hdl.handle.net/2115/86531</a>
Type	bulletin (article)
File Information	03_167_Shimizu.pdf



[Instructions for use](#)

## ドイツ語から見たゲルマン語 (8)

### — 不定詞と分詞 —

清水 誠

German as a Germanic Language (8)

— Infinitives and Participles —

(*Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences* No. 167.

Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University.

Sapporo/Japan. 2022. ISSN 2434-9771)

SHIMIZU, Makoto

(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

### 1. 動詞の不定詞と現在形—どちらが動詞らしいか<sup>1</sup>

往年の優れた独辞典に *Der Sprach-Brockhaus. Deutsches Bildwörter-*

---

<sup>1</sup> 本研究は清水 (2019) (2020) (2021a) (2021b) (2021c) (2021d) (2022) の続編であり、科研費の助成による (ゲルマン語類型論から見たドイツ語の新しい構造記述, 基盤研究 (C) (一般), 19K00540)。カッコ内の用語は原則として英語名による。用例などで使用する言語名の略語は次のとおり。ア: アイスランド語, ア7: アフリカーンス語, イ: イディッシュ語, 印欧: 印欧祖語, 英: 英語, オ: オランダ語, ギ: ギリシャ語, ゴ: ゴート語, 古英: 古英語, 古高ド: 古高ドイツ語, 古ザ: 古ザクセン語, 古ノ: 古ノルド語, 古フ: 古フリジア語, ザ: (西) 低地ドイツ語北低地ザクセン方言, ス: スウェーデン語, 旡: スイスドイツ語チューリヒ方言, 中高ド: 中高ドイツ語, デ: デンマーク語, ド: ドイツ語, 西フ: 西フリジア語, ニュ: ノルウェー語ニューノシユク, フヰ: 北フリジア語フェリング方言, フオ: 上部ドイツ語フォーアアルルベルク方言, ラ: ラテン語, ル: ル

*buch* (1974<sup>8</sup>)がある。精緻なイラスト満載の優れた辞典だが、動詞の見出し語を現在形 (ich) *lerne* 「(私は) 学ぶ」で示している点に特徴がある。現在の大多数の類書とは異なる方式だが、これなら、ich *lerne aus* 「私は修行を終える」(auslernen)/ich *lerne ihn an* 「私は彼に職業訓練を施す (anlernen)」のように分離動詞も検索でき、後者では「教える」の意味になることも理解できる<sup>2</sup>。それに、これはギリシア語やラテン語の辞書とも共通する由緒正しい見出し語の表示方法でもある。

一般にドイツ語教育では、動詞は不定詞 *lernen* が基本で、そこから現在形 (ich) *lerne* を導くと教えるのが定番である。しかし、本来、不定詞とは動詞の名詞用法「～すること」の語形である。*Der Sprach-Brockhaus* の例文：ド er *lernt {Englisch/schwimmen/Gitarre spielen}* 「彼は英語/泳ぎ/ギター演奏を学ぶ」(ib. 402) のように、*Gitarre spielen* 「ギターを弾くこと」では名詞句を支配して目的語にもなる。一方、定冠詞つきの *das Lernen* 「学習」は完全な中性名詞である。英語では普通、名詞用法の不定詞を *to learn* 「学ぶこと」と示すが、この *to* を「不定詞標識」(infinitive marker) と言う<sup>3</sup>。北ゲルマン語も同様である (ド *Irren* ist menschlich. 過ちは人の常 ↔ 英 *To err* ist human./ス *Att fela* är mänskligt, ス att=英 to)。映画 (アメリカ 1942 年) の題名にもなった『ハムレット』の名言、英 *To Be or not to Be* 『生きるべきか死ぬべきか』も、スウェーデン語名は *Att vara eller icke vara* だが、ドイツ語名は *zu* なしの *Sein oder Nichtsein* だった。

そもそもドイツ語の不定詞 *lernen* と現在形 (ich) *lerne* は、どちらが「動詞らしい」だろうか。「だれがいつ何を」と言える後者のほうだろう。現代語

クセンブルク語、ロ：ロシア語

<sup>2</sup> 「学ぶ」と「教える」は知識の移動を捉える視点の相違から、ゲルマン諸語では同一語で表したり、言語によって対応語どうしの意味が異なる場合がある。ド *lehren* 「教える」も *Lehrling* 「徒弟」/*Lehrjahre* 「徒弟・修業時代」では「学ぶ」の意味である。オ *leren*/*delære* 「学ぶ、教える」も同様。ス *lära* 「教える」↔ *lära sig* 「習う」では再帰動詞で区別する。「借りる」/「貸す」、「買う」/「売る」などについても同様。

<sup>3</sup> 後期中英語 (1300~1500) までは、*to* なし不定詞を頻用した (中尾 1983: 193)。

の常識とは異なって、歴史言語学的に見ると、元来、ゲルマン諸語の不定詞は種々の接尾辞による動詞からの派生名詞だった。ラ *discere*/ギリ *μανθάνειν* (*manthánein*)/ロ *изучать* (*izučat'*)「学ぶ」を比較すればわかるように、印欧諸語の不定詞(不定法)の目印は一致しない。「バルカン言語連合」(ド *Balkansprachbund*)に属する諸言語では、動詞の語形に不定詞が失われてしまった。つまり、不定詞はなくても困らないわけである。

## 2. 動詞の定形と不定形— 2通りの活用

ド *das Essen*「食事, 食物」(← *essen* 食べる)のように、動詞は派生によって完全な名詞になる。「派生」(derivation)による品詞の変更は、名詞や形容詞でも可能である。しかし、ゲルマン諸語の動詞は動詞のまま、「屈折」(inflection)によって現在形にもなれば、不定詞として名詞的にも使える。この「二刀流」とも言うべき2通りの活用は、動詞に固有の能力である。一方、動詞には名詞用法としての不定詞と並んで、形容詞用法もあり、それが「現在分詞」(present participle)と「過去分詞」(past participle)を含む「分詞」(participle)である。

屈折による動詞の語形は二手に分かれる。ドイツ語を例にとると、まず、ド (*ich*) *lerne* は「だれが(主語の人称・数)いつ(テンス(時制 *tense*))どんな気持ちで(ムード(法 *mood*))」という発話状況に関する語形である。直説法現在・過去形、接続法 I・II 式、命令形を「定形」(finite form)または「定動詞」(finite verb)と言う。一方、発話状況とは無関係の不定詞 *lernen* と分詞(現在分詞 *lernend* と過去分詞 *gelernt*)は「不定形」(非定形 *non-finite form*)である。ちなみに、不定詞を「不定形」と誤記しているドイツ語教科書があるので、注意を要する。

古ゲルマン諸語の不定形は次のとおりである。不定詞の目印は、-(i)an/-ēn/-a (ド -en <ゲ \* -a-na-(n) <印欧 \* -o-no-m)であり、現在分詞では、-and/-end/-ant/-ēnt-(ド -end <ゲ \* -a-nd- <印欧 \* -o-nt-)がそれにあたる。過去分詞の目印としては、強変化動詞(いわゆる不規則動詞)の -an-/in-/

-en (ド -en/英 -(e)n <ゲ \* -a-na/-e-na-<印欧 \* -o-nó-/\* -e-nó-), 弱変化動詞 (いわゆる規則動詞) の -p/-d/-t (ド -t/英 -ed <ゲ \* -ða <印欧 \* -tó) が挙げられる。それぞれ名詞・形容詞派生接尾辞に由来する。なお, 次表では過去分詞を男性単数主格形で示す (強変化: ド (ge-)bären/英 bear, 弱変化: ド haben/英 have)。

(1)	不定詞	現在分詞	過去分詞
ゴ	bairan/haban	bairands/habands	baúrans/habaiþs
古ノ	bera/hafa	berandi/hafandi <sup>4</sup>	borinn/hafaþr
古英	beran/habban	berende/hæbbende	boren/hæfd
古ザ	beran/hebbian	berandi/hebbiandi	giboran/gihabd
古高ド	beran/habēn	beranti/habēnti	giboran/gihabēt

それぞれの語形に説明を施してみよう。

不定詞 -an (>ド -en) の語末音 -n は古ノルド語で脱落した。

現在分詞の -nd は, nd-語幹名詞のド *Freund*/英 *friend* 「友人」と共通である。古くは動詞的性質が希薄だったのであり, ゴート語の対応語 *frijōnds* は, *frijōn* 「愛する」の現在分詞の名詞化によるもので, 「愛している人」が原義である。

過去分詞の接頭辞 *gi-* (>ド *ge-*) は西ゲルマン語に特有である。北海ゲルマン語に属する古英語では, 前舌母音の直前で *g/g/* が「口蓋化」(palatalization) して *ǰe-/jə/* となり (英 *yesterday* ↔ ド *gestern* [ˈɡɛstɛn]), 無強勢音節で消滅した。英 *enough* 「十分な」(↔ ド *genug* [gəˈnu:k]) の *e-* はそのなごりである。

次に, 現代ゲルマン諸語を概観してみよう (強変化: ド/英 *sing* 歌う; 弱変化: ド *leben*/英 *live* 生きる, ド *tanzen*/英 *dance* 踊る)。

<sup>4</sup> 古ノ *borinn* を含めて, 古ノ *berande/hafande*, *borenn* と示すこともある。

(2) 不定詞	現在分詞	過去分詞
① ド <u>singen/leben/tanzen</u>	singend/lebend/tanzend	gesungen/gelebt/getantzt
② 英 <u>sing/live/dance</u>	singing/living/dancing	sung/lived/danced
③ ル <u>sangen/liewen/danzen</u>	∅/∅/∅	gesongen/gelieft/gedanzt
(語末音 <u>-n</u> は「アイフェル規則」 <sup>5</sup> に従って脱落する)		
④ フ <u>singe/lā(ā)be/tanze</u>	∅/∅/∅	gsunge/glābt/tanzet
⑤ ザ <u>singen/leven/danzen</u>	singen/leven/danzen	sungen/leefvt/danzt
⑥ オ <u>zingen/leven/dansen</u>	zingend(e)/levend(e)/dansend(e)	gezongen/geleefd/gedanst
(語末音 <u>-en</u> [ə(n)] の <u>-n</u> はオランダの標準オランダ語では発音しない)		
⑦ フ <u>sing/leef/dans</u>	singend/lewend/dansend	gesing/geleef/gedans
⑧ 西 <u>sjonge/libje/dünsje</u>	sjongend(e)/libjend(e)/dünsjend(e)	songen/libbe/dünse
⑨ フ <u>sjong/lewe/daanse</u>	∅/∅/∅	süngen/leeft/daanset
(第2不定詞: ⑧ 西 <u>sjongen/libjen/dünsjen</u> , ⑨ フ <u>sjongen/lewin/daansin</u> , 4 参照)		
⑩ イ <u>zingen/lebn/tantsn</u>	zingendik/lebndik/tantsndik	gezungen/gelebt/getantst
⑪ ア <u>syngja/lifa/dansa</u>	syngjandi/lifandi/dansandi	sungid/lifað/dansað
⑫ ニ <u>syngja/leva/dansa</u>	syngjande/levande/dansande	songe/levt, levd/dansa <sup>6</sup>
⑬ ス <u>sjunga/leva/dansa</u>	sjungande/levande/dansande	sjungit/lev(a)t/dansat
(ス <u>-it/- (a)t/-at</u> はスピースム), <u>sjungen/-levd/dansad</u> (過去分詞, 4 参照)		

まず、不定詞について：語尾 -en/(-n) を伴うのが本来の語形だが、⑪⑫⑬北ゲルマン語と④スイスドイツ語チューリヒ方言には、語末音 -n がない。③ルクセンブルク語、⑥オランダ語でも、語末音 -n は脱落する傾向がある。②英語、⑦アフリカーンス語、⑨北フリジア語フェリング方言の強変化動詞は、ゼロ語尾で語幹だけからなる。

現在分詞について：-nd- を伴うのが基本だが、⑤低地ドイツ語北低地ザク

<sup>5</sup> 「アイフェル規則」(ド Eifler Regel, フラ règle de l'Eifel) とは、ルクセンブルク語で語末音 -n が母音/h/n/d/t/z [ts] ([dz]) の直前以外で脱落する現象を指す。

<sup>6</sup> ニューノシュクの語形には類書によって異同があるが、ここでは Moen/Pedersen (1998) に従って示す。

セン方言は不定詞 -en と同形である。③ルクセンブルク語, ④スイスドイツ語チューリヒ方言, ⑨北フリジア語フェリング方言では衰退している。⑩イディッシュ語では, -nd- に形容詞派生接尾辞 -ik (ド -ig) を伴う。②英語の -ing はユニークであり, 名詞用法の動名詞 -ing と同形であるのは, 他のゲルマン諸語に類例を見ない。

過去分詞について : 強変化動詞は語幹母音の母音交替, 弱変化動詞は歯音接尾辞の付加を伴うのが基本だが, ⑧西フリジア語の弱変化 je-動詞 (libbe/dünse ← libje/dünsje) と⑫ニューノシユクの弱変化 a-動詞 (dansa ← dansa) には, 歯音接尾辞がない。⑪⑫⑬北ゲルマン語の強変化動詞の過去分詞 (スウェーデン語はスピーヌム) につく -ð/-t/-d は, 中性単数語尾に由来し, 歯音接尾辞ではない。⑦アフリカーンス語は強・弱変化ともにゼロ語尾であり, 母音交替も歯音接尾辞の付加もなく, 「ge-+語幹」のみから成っている。

過去分詞の接頭辞 ge- は⑪⑫⑬北ゲルマン語にはない。北海ゲルマン語の後裔である②英語, ⑧西フリジア語, ⑨北フリジア語フェリング方言でも, 接頭辞 ge- は失われている。⑤北低地ザクセン方言にも残っておらず, 中低ドイツ語でもすでに衰退傾向にあった (Lasch 1974 (1914): 125f, Lübben 1970 (1882): 91)。

一方, 内陸ゲルマン語の①ドイツ語, ③ルクセンブルク語, ⑥オランダ語, ⑦アフリカーンス語は ge- を伴う (ただし, ル *kaaft* ← *kafen* 買う (k < ge-k) ↔ ド *gekauft* ← *kaufen*)。④スイスドイツ語チューリヒ方言では, 接頭辞 ge- は g- に短縮し, 一部の子音連続では現れない (*tanzet* ← *g-tanzet*, t ← g-t/d; z ← g-z; pf ← g-pf; k ← g-k; p ← g-b/p; Schobinger 2007<sup>3</sup>: 20)。上述のとおり, ⑦アフリカーンス語では強変化動詞も語幹が無変化であり, 語尾を欠いており, ge- が過去分詞の唯一の目印になっている。⑥オランダ語は語頭で弱音節が連続しても, 接頭辞 ge- をつける (オ *gestu'deerd* ← *stu'deren* 大学で学ぶ, 「」は強勢 ↔ ド *stu'diert* ← *stu'dieren* / ル *stu'déiert* ← *stu'déieren* / 77 (ge) *stu'deer* ← *stu'deer*)。ドイツ語ではつけないが, 中高ドイツ語 (例: *gepar'rier(e)t* まだらの) では ge- がついていた。⑥オランダ語では, 無強勢接頭辞の連続も可能である (オ *veront'schuldigen/bege'nadigen*

許す/赦免する ↔ ド *ent'schuldigen/be'gnadigen* (g-n/l < ge-n/l, 中高ド *beg(e)näden*), オ *genade/geluk* 恩恵/幸運 ↔ ド *Gnade/Glück*, 上記の④スイスドイツ語チューリヒ方言の例参照)。

### 3. 不定形の種類—不定詞, 現在分詞, 過去分詞

1. で述べたように, 古い印欧語の不定詞・分詞は純粋な派生名詞・形容詞だったが, ゲルマン語では動詞的性質が加わった。不定詞は目的語を伴う「格支配」(ド *Rektion*) が可能で, 完全な名詞化は稀だった。不定詞のヴォイス(態)は能動・受動に中立だった(古高ド *ik gihörta dat seggen* 私はそれが語られる/それを語る (*seggen*, ド *sagen*) のを聞いた (*gihörta*, ド *hörte*), ド *Hildebrandslied*, (18)参照)。

一方, 分詞では事情が異なる。古ゲルマン諸語の分詞は単独で形容詞的に使う例が多く, 目的語を伴う例は稀で, 動詞的性質が希薄だった。今でも目的語を伴う現在分詞の分詞構文は, 書き言葉的である。不定詞句とは大きな違いと言えよう。

現在分詞は「能動分詞」(active participle), 過去分詞は「受動分詞」(passive participle) とも言う (Fulk 2018: 253)。現在分詞の「現在」は未完了, 過去分詞の「過去」は完了というアスペクトを表し, 前者は「動作の継続」, 後者は「結果としての状態」と結びつく。「未完了/動作の継続—能動態」, 「完了/結果としての状態—受動態」の結合は, 意味的に自然である。「子供がガラスを割った」では, 動作「割った」の結果, 新たな状態は被動者の「ガラス」に生じる。一方, 動作主の「子供」は状態が変わらない。動作主中心の表現である能動態は現在分詞と相性が良く, 被動者中心の表現である受動態は過去分詞と相性が良いと言える。一方, 被動者を主語とする自動詞(非対格動詞, 例: ガラスが割れる)では, 能動態の語形が受動態の意味に対応するので, 過去分詞とも結びつきが良い(4.の説明参照)。

動作の結果が明確な「割る」などに対して, 結果が不明確な動作や状態を表す他動詞では, 同じアスペクトの能動と受動のペアになる。「ド 現在分詞



der *liebende* Mann 愛している男 ↔ 過去分詞 die *geliebte* Frau 愛されている女」(lieben 愛する)はそれぞれ熱々のカップルを代弁しており、後者は在りし日の回想ではない。

現在分詞には、次のような例外的用法が目立つ。一方、過去分詞による類例(ド eine *studierte* Frau 大学出の女性)は、あまり多くない。

- (3) ド eine {*vorhabende/vorgehabte*} Reise {計画中の(現在分詞)/計画されている(過去分詞)} 旅行(他動詞 *vorhaben* 計画する)<sup>7</sup>  
 eine *sitzende* Tätigkeit すわってする仕事(デスクワーク, 自動詞 *sitzen* すわっている)  
 ein *zurückhaltender* Mensch 控えめな人(再帰動詞 *sich zurückhalten* 自制する, 再帰代名詞 *sich* の不在に注意)

結果として生じる状態の意味が不明確な自動詞には、古くは過去分詞がなかった。(4)②が不可であるのは、その反映と言える。(4)④に示す *haben* 支配の自動詞の完了形は、古高ドイツ語末期に「haben + 他動詞の過去分詞」による完了形構文が確立した後で、類推によって生まれた(Fleischer 2011: 123-129)。

- (4) ド ① das *ingeschlafene* Kind 寝入った子供(*einschlafen* 寝入る)  
 ↔ ② \*das *geschlafene* Kind 眠った子供(*schlafen* 眠る, 寝ている)<sup>8</sup>

<sup>7</sup> 過去分詞 *vorgehabte* に対して、現在分詞 *vorhabende* は例外的な用法である。

<sup>8</sup> ただし、ド das *gut geschlafene* Kind 「よく眠った子供」は可能と判定される。このように、厳密には、アスペクトは動詞自体(ド *schlafen* 眠る)ではなく、動詞句(ド *gut schlafen* よく眠る)のレベルで最終的に決定されると言える。なお、いわゆる分離動詞(ド *trennbares Verb*)の名称で知られる不変化詞動詞(*particle verb*)も、動詞句とみなすことができる(ド *schlafen* 眠る ↔ 不変化詞動詞: *einschlafen* 寝入る)。その理由の1つとして、過去分詞(ド *geschlafen* ↔ *ingeschlafen*)と *zu*-不定詞(*zu schlafen* ↔ *einzuschlafen*)で接頭辞 *ge-* と不定詞標識 *zu* がいわゆる分離成分、すなわち不変化詞

- ③ Das Kind *ist eingeschlafen*. 子供は寝入った  
 ↔ ④ Das Kind *hat geschlafen*. 子供は眠った

#### 4. スウェーデン語のスピーヌムと過去分詞

上記の事情を反映する具体例が、スウェーデン語の「スピーヌム」(supinum)<sup>9</sup>と過去分詞(ス perfekt particip, 以下では下線で明示する)である。スピーヌムは無変化で、完了形に使う(ス 完了の助動詞 ha (英 have) + スピーヌム<sup>10</sup>)。他動詞のスピーヌムは能動の意味で目的語を伴い、動詞的性質を有する。過去分詞は「受動の助動詞 bli (ド werden)/vara (ド sein)/コピュラ + 過去分詞」や名詞修飾語「過去分詞 + 名詞」で使う。他動詞の過去分詞は受動の意味で、主語や被修飾名詞と一致して形容詞変化するので、動詞的性質が希薄である。両者の区別は、18世紀のスウェーデンの文法家サールステッド (Abraham Sahlstedt 1716~1776) の規範化に由来し (Wessén 1968<sup>9</sup>: 125), 本来、スピーヌムは過去分詞の中性単数主・対格形だった。なお、強変化動詞では、スピーヌムと過去分詞中性単数主・対格形は一致しない: (5) skrivit ↔ skrivet)。

(5) ス 不定詞	スピーヌム	<u>過去分詞</u> (両性単数/中性単数/複数)
弱変化 stänga 閉める	stängt	stängd/stängt (←-d)/stängda
強変化 skriva 書く	skrivit	skrivn/skrivet/skrivna (←-en-a)
skriva väl 上手に書く	skrivit väl	välskriven/välskrivet/välskrivna

(particle) のド ein とは無関係に、動詞 schlafen 自体に付加される点が挙げられる。分ち書きか続け書きかという区別は、正書法上の便宜にすぎず、語を認定する根拠とは言いがたい (オ slapen 眠る ↔ inslapen 寝入る — te slapen ↔ in te slapen)。

<sup>9</sup> 尾崎 (1955: 55) 以来、日本語ではスピーヌムを「完了分詞」と呼ぶことが多いようである。

<sup>10</sup> スウェーデン語の完了の助動詞は ha (ド haben) に限られる。

- (6) ス Han **har stängt** |en dörr/ett fönster/dörrar|. 彼は |ドア (両性単数) /窓 (中性単数)/ドア (複数)| を閉めた (現在完了形 *har stängt*, スピーヌム)  
 en **stängd** dörr/ett **stängt** fönster/**stängda** dörrar 閉められたドア (両性単数)/窓 (中性単数)/ドア (複数) (過去分詞)
- (7) ス Han **har skrivit** |en uppsats/ett brev/uppsatser| **väl**. 彼は |作文 (両性単数)/手紙 (中性単数)/作文 (複数)| を上手に (*väl*) 書いた (現在完了形 *har skrivit*, スピーヌム← *skriva väl* 上手に書く)  
 en **välskriven** uppsats/ett **välskrivet** brev/**välskrivna** uppsatser  
 上手に (*väl*-) 書かれた作文 (両性単数)/手紙 (中性単数)/作文 (複数) (過去分詞)

スピーヌムは動詞の屈折形なので、(7) ではそれ自身で1語だが、形容詞的性格が強い過去分詞は、「副詞+過去分詞」で1語になっている。en **skrivnen** uppsats「書かれた作文」だけでも可能だが、*väl*-「上手に」で結果の意味を補強している (英 *well-known*～ス *välkänd* (← *känna väl* よく知っている) )。

*sova*「眠る」(ド *schlafen*) のように継続の意味を表し、結果としての状態が不明確な自動詞には、スピーヌム *sovit* はあっても、過去分詞はない。一方、結果としての状態が明確な自動詞 *sjunka*「沈む」には、①過去分詞 *sjunken*「沈んだ」がある。これは他動詞 *sänka*「沈める」の②過去分詞 *sänkt*「沈められた」と「①能動↔②受動」のペアになり、「①自動詞主語=②他動詞目的語」の関係を表す。受動態では対格が使えないので、主格で現れるという意味で、*sjunka*「沈む」型の自動詞を「非対格動詞」(*unaccusative verb*) と言う (または能格動詞 *ergative verb*)。 *sova*「眠る」型の自動詞は「非能格動詞」(*unergative verb*) である。ドイツ語では非対格動詞を「過程動詞」(ド *Vorgangsverb*)、非能格動詞を「行為動詞」(ド *Tätigkeitsverb*) と呼び、およその目印として、前者は完了の助動詞が *sein* 支配 (ド *gesunken sein* 沈んだ)、後者は *haben* 支配である (ド *geschlafen haben* 眠った)。なお、

注 10 で述べたように、スウェーデン語は ha-支配のみであり、ドイツ語の sein-支配にあたる vara-支配は失われている。

スウェーデン語の不規則動詞変化表で自動詞を中心に過去分詞に空欄が目立つのは、(4)②について述べたのと同じ理由による。ただし、非能格動詞 leva「生きる」には過去分詞がなくても、複合動詞 uppleva「体験する」は他動詞なので、受動の意味の過去分詞 upplevd「体験された」が可能である。そこで、-levdのようにハイフン(-)をつけて示するのが通例である。ス köra på「(車が)ひく」などの「動詞+不変化詞」型の分離動詞(英語の句動詞)では、スピーヌム kört på「(車が)ひいた」に対して、過去分詞は påkörd「(車に)ひかれた」という逆の語順で1語でつづる。

(8) ス	不定詞	スピーヌム	<u>過去分詞</u> (両性単数/中性単数/複数)
sjunka	沈む	sjunkit	sjunken/sjunktet/sjunkna
sänka	沈ませる	sänkt	sänkt/sänkt (←-t-t)/sänkta
sova	眠る	sovit	Ø
leva	生きる	lev(a)t	Ø (-levd/-levt/-levda)
uppleva	経験する	upplev(a)t	upplevd/upplevt/upplevda
köra på	(車が)ひく	kört på	påkörd/påkört/påkörd

(9) ス Båten **har sjunkit**. 船は (båten) 沈んだ (非対格動詞・現在完了形 har sjunkit, スピーヌム) — en **sjunken** båt 沈んだ船 (過去分詞)  
 Båten ligger **sjunken** på botten. 船は水底に (på botten) 沈んだまま  
 までいる (ligger sjunken 過去分詞 ← ligga 横になっている)

(Hultman 2003: 80 変更)

(10) ス Båten **blev sänkt**. 船は沈められた (他動詞・受動態過去 blev sänkt, 過去分詞) — en **sänkt** båt 沈められた船 (過去分詞)  
 Båten ligger **sänkt** på botten. 船は水底に (på botten) 沈められた  
 ままでいる (ligger sänkt 過去分詞) (ib. 80 変更)

(11) ス En bil **har kört på** honom. 車が<sup>s</sup> (en bil) 彼を (honom) ひいた (現

在完了形 har kört på スピーヌム)

Han **blev påkörd** av en bil. 彼は (han) 車に (av en bil) ひかれた  
(受動態過去 blev påkörd 過去分詞) (ib. 156)

デンマークの言語学者ベック (Gunnar Bech 1920~1981) は、ドイツ語の動詞体系を分析した名著『ドイツ語動詞不定形の研究』(ド *Studien über das deutsche Verbum infinitum* 1983<sup>2</sup> (1955/57)) の中で、次の定式化を出発点としている。ラテン語文法の枠組と並んで、上記のスウェーデン語の2分法が念頭にあったとも推測される。

(12)	第1階層 (1. stufe, supinum)	第2階層 (2. stufe, partizipium)
第1位相 (1. status)	lieben	liebend(-er)
第2位相 (2. status)	zu lieben	zu lieben(d-er)
第3位相 (3. status)	geliebt	geliebt(-er)

(Bech 1983<sup>2</sup>: 12)

## 5. zu-不定詞—不定詞標識と前置詞の間

### 5-1. zu-不定詞の起源—不定詞から zu-不定詞へ

ドイツ語の不定詞には zu-不定詞 (ド zu lernen/英 to learn) もある。ド zu (英 to) は不定詞標識 (1. 参照) で語彙の意味が希薄だが、以前は目的・結果の意味の前置詞だった。直後の不定詞も中性主・対格の「名詞もどき」で、zu Hause「自宅で」(← das Haus 家) と同じく与格語尾 -e を伴っていた。つまり、「中高ド ze (<古高ド za/zi) + [動詞語幹 + -enne (>-ene)]」(中高ド *nemenne* ← nemen 取る, ド nehmen) という「前置詞句不定詞」(prepositional infinitive) だった。西ゲルマン語に見られるこの「屈折不定詞」(inflected infinitive) を「動名詞」(gerund/ド Gerundium) と言う。属格(中・古高ド -ennes) もあり、ド *Essenszeit*「食事の時間」はそのなごりである。英語に限って、learning「学ぶこと」という名詞用法の語形を動名詞と呼ん

でいる。この英 -ing はドイツ語の -ung (die Erlernung 習得← *erlernen* 習得する) やオランダ語の -ing (de lering 教育← *leren* 学ぶ, 教える) と同源の名詞派生接尾辞だった。英 the e-learning 「e ラーニング」は完全な名詞である。

中高ドイツ語の例を見てみよう。ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク (Gottfried von Straßburg 1170 頃～1210 頃) の未完の大作『トリスタン』(ド *Tristan*) の一節で、誤って愛の媚薬を飲み交わしたトリスタンとイゾルデの禁断の不倫を嘆いて、侍女のブランゲーネが誓いを立てる場面である。ze lebene 「生きるべく」(←不定詞 leben + 中性単数与格語尾 -e, ド zu leben) の 2 例がそれである。前置詞 ze 「～のために」の目的の意味が生きているのが分かる。

- (13) 中高ド Hërre, diu selbe kurze vrist, / die ich noch **ze lebene** hân, / diu sol mit iu zwein hine gân, / daz ich iu beiden gelebe / und iu **ze lebene** rât gegebe. ご主人様 (hërre), まだ (noch) 生きるべく (ze lebene) 私が持っている (die ich~hân) この短い命の時間は (diu selbe kurze vrist), あなた様方お二人とともに (mit iu zwein) 過ぎ行く覚悟でございます (diu sol~hine gân)。あなた様方お二人のために (iu beiden) 私が生き (daz ich~gelebe), そして (und) あなた様方に (iu) 生きるべく (ze lebene) ご助言申し上げるために ((daz ich)~rât gegebe)。

(*Tristan* 14450-14454)

ゴート語や稀に古高ドイツ語では、形容詞の目的語や名詞の修飾句にも zu なし不定詞が現れる ((14))。今では、他動詞の目的語に zu-不定詞句を使うが、中高ドイツ語では、ze (>ド zu) を欠くのが普通だった ((15))。イディッシュ語にはそのなごりが見られ、tsu-不定詞句の代わりに、不定詞標識 tsu を欠く不定詞句を目的語とする他動詞が多い ((16))。この種の不定詞は目的・結果の意味を表していた。その意味を補強する手段として、目

的の意味を表す前置詞 *zu* を添えるようになった。かつての不定詞は、語法・使役の助動詞などに残ったのである。

- (14) ゴ atgaf izwis **waldufni** [*trudan* ufarō waúrmē jah skaúrpjōnō] おま  
えたちに (izwis) [蛇やさそりを (ufarō waúrmē jah skaúrpjōnō) 踏  
みつけるための (*trudan* 不定詞)] 力を (*waldufni*) 私は与えた (atgaf)  
(*Luke* 10, 19)

⇔ ド ich habe euch **Macht gegeben**, [*zu treten* auf Schlangen und  
Skorpione]

古高ド ni bim iu **uuirdig** [*ginemnit uuesan* thīn sun] [あなたの息子  
と (thīn sun) 呼ばれるのに (*ginemnit uuesan* 不定詞)] 私は値  
しません (ni bim iu uuirdig) (*Tatian* 97: 3)

⇔ ド ich bin nicht **würdig**, [dein Sohn *genannt zu werden*]

- (15) 中高ド ich **bite** mir got **helfen** 私は神様に私を助けて (*helfen* 不定詞)  
いただくようお願いします (*Iwein* 7934)

⇔ ド ich **bitte** Gott mir **zu helfen**

中高ド Diu frouwe **begunde weinen**. 貴婦人は泣き (*weinen* 不定詞)  
始めた (泣いた) (*Dietmar von Eist*)

⇔ ド Die (edle) Frau **begann zu weinen**.

- (16) イ Ikh **bet** aykh **araynkumen**. 私は (ikh) あなたがたに (aykh) お入  
りになるように (*araynkumen* 不定詞) お願いします (bet)  
(*Lockwood* 1995: 116)

⇔ ド Ich **bitte** Sie **hereinzukommen**.

イ Mir **vintshn zen** dos eyfele. 私たちは (mir) その赤ちゃんを (das  
eyfele) 見ることを (*zen* 不定詞) 望んでいます (*vintshn*)  
(ib. 116)

⇔ ド Wir **wünschen** das Baby **zu sehen**.

イ Er **hot** shoyn **oyfgehert redn**. 彼は (er) もう (shoyn) 話し (*redn*  
不定詞) 終えた (*hot~oyfgehert*) (ib. 116)

↔ ド Er *hat* schon *aufgehört zu reden*.

イ Zi *pruvt farkoyfn* di alte mebl. 彼女は (zi) その古い家具を (die alte mebl) 売ろうと (farkoyfn 不定詞) している (試みている pruvt)  
(ib. 116)

↔ ド Sie *versucht* die alten Möbel *zu verkaufen*.

## 5-2. zu-不定詞の変遷—前置詞から不定詞標識へ

かつての zu-不定詞の目的・結果の意味を反映するのが, (17) に示す「ド zu-不定詞+sein (stehen/bleiben)」(～され得る(可能), ～されるべきだ(義務))である。この構文は古高ドイツ語やゴート語にもある (Dal/Eroms 2014<sup>4</sup>: 119)。(18) のように, 「ド zu-不定詞+haben」という構文にも, 「英 have to [ˈhæftə]+不定詞」(～しなければならない) に比べて, 「～するべきものを持っている」という語彙的意味が生きている。

(17) ド Dieses Problem *ist* {leicht/unbedingt} *zu lösen*. この問題は {解きやすい (=容易に解かれる)/絶対に解かねばならない (=解かれるべきだ)}

(18) ド Ich *habe* viele Probleme *zu lösen*. 私は解くべき問題がたくさんある/たくさん問題を解かねばならない

ドイツ語では, (17) は受動の意味に限られる。英 He *is to come* tomorrow. 「彼は明日来る予定だ」に対して, ド \*Er *ist* morgen *zu kommen*. とは言えない。英 He *is not to blame*. 「彼は責められない」(Jespersen 1965 (1924): 171) は, 不定詞が名詞起源で能動・受動に中立だった間接的証拠である (保坂 2014: 88)。(17) のド leicht 「容易に」は副詞用法なので, なくても文は成り立つ。

ドイツ語によるこの (17) は, 英 This problem *is easy to solve*. 「この問題は [解くのが (to solve) 容易だ (is easy 述語形容詞)]」とは別の構文である。17 世紀初頭以降に例証される名詞修飾用法 (Lockwood 1968: 153) と比較さ



りたい (ド ein [*leicht zu lösendes*] Problem [容易に解かれ得る] 問題 ↔ 英 a problem [*easy to solve*] [解くのが容易な] 問題)。

このほかにも、「不定代名詞+zu-不定詞」(ド etwas *zu essen* 何か食べるもの=食べるべき何か)のzu-不定詞は、名詞句を支配せず、zuにも目的の意味があり、前置詞の性格を保つ用法と言える。

その他の不定詞標識によるzu-不定詞は、目的・結果の意味が希薄である。これに対して、ド *Zum Essen* oder *Mitnehmen*? 「お召上がり用ですか、お持ち帰り用ですか」のzumは、前置詞zu「～のために」と定冠詞-m (←dem)の融合である。このEssen/Mitnehmen (←essen/mitnehmen 食べる/持ち帰る)は中性名詞になっており、全体で完全な前置詞句を形成していると言える。

ド zu-不定詞のzuは英 to-不定詞のtoよりも独立性が弱く、動詞との結びつきが密接である。その証拠に、「分離不定詞」(split infinitive, (19)①), 等位接続での省略((19)②), 不定詞の欠如((19)③)は許されない。『ドゥーデン文法』(Duden 2009<sup>8</sup>: 439)は、zu lernenのzuは過去分詞gelerntのgeに比肩でき、独立の語よりもむしろ「前置された屈折要素」(ド „ein vorangestelltes Flexionselement“, ib. 439)とみなすべきであるとさえ述べている。また、(19)①④ではド um~zu-不定詞「～するために」の前置詞um「～のために」が必要だが、英 to-不定詞では不要である。英 toは以前の前置詞の意味をド zuよりも強くとどめていると言える。

(19) ① ド Sie waren vorsichtig, *um* die Atmosphäre {*\*zu nicht/nicht zu zerstören*}. 彼らは雰囲気を壊さないように気をつけていた  
↔ 英 They were careful *to not destroy* the atmosphere.

(Pafel 2011: 22f.)

② ド Sie versuchten *zu singen und {*\*Ø tanzen*/zu tanzen}*. 彼らは歌って踊ろうとした ↔ 英 They tried *to sing and Ø dance*.

(ib. 22f.)

③ ド Sie legen Eier, wie sie es gewohnt waren {*\*zu Ø/zu tun*}. それ

らはいつもそうしていたように卵を産んでいる

↔ 英 They are laying eggs, just like they used *to* Ø.

(ib. 22f. 変更)

- ④ ド Das ist *zu schön, um* wahr *zu sein*. それは素晴らしすぎて本当とは思えない (=それは真実であるにはあまりに素晴らしすぎる)

↔ 英 That is *too good to be* true.

### 5-3. 「前置詞+zu-不定詞」と R-代名詞—西ゲルマン語と北ゲルマン語

北ゲルマン語の不定詞標識に転用した前置詞は、方向・目的の意味の英 at と同源のア að/ス att/フエ・デ at/ブ・ニ ユ å (<古ノ at) である。やはり英よりも前置詞の性格が希薄で、目的の意味には別の前置詞を必要とする。西ゲルマン語からドイツ語、オランダ語、ルクセンブルク語も交えて、「生きるためには食べなければならない」の用例を比較してみよう。次例では、英 {in order/so as} to-不定詞「～するために」とも言えるが、英語では目的の意味を表すのに to-不定詞だけで十分である<sup>11</sup>。

- (20) 英 You must eat *to live*.                      ド Man muss essen, *um zu leben*.  
 オ Men moet eten *om te leven*.              ル Du muss iesse *fir ze lieven*.  
 ス Man måste äta *för att leva*.              ア Maður verður að borða *til að lifa*.

上例では、英語を除いて、不定詞標識 (ド zu/オ te/ル ze/ス att/ア að) を伴う不定詞句は、目的の意味の前置詞「～のために」(ド um/オ om/ル fir/ス för/ア til) に支配された前置詞句 (PP) になっている。これは英語で

<sup>11</sup> ただし、中英語には、(20) の現代英語以外の例と似て、前置詞 for 「～のために」を加えた「for to+不定詞」もあった (Mustanoja 1960: 534)。中尾/児馬 (1990: 180) の次の説明を参照: 「これ (=for to 不定詞, 筆者注) は、方向や目的を表す to の原義が失われ、to が不定詞の一部とみなされたため、その埋め合わせとして別の前置詞 for を用いて、失った意味を補おうとした変化と考えられる」。

は不可能で, *without* [\*to say/saying a word] 「一言も言わずに」のように動名詞-ingを援用する。その他の西ゲルマン語では, ド *ohne* [ein Wort *zu sagen*]/オ *zonder* [een woord *te zeggen*] は可能だが, 語彙の意味を保ち, 副詞句としてはたらく少数の前置詞に限られている (ド um/ohne/(an)-statt~zu-不定詞 ~するために/せずに/代わりに; オ om/zonder/in plaats van/door, met/alvorens/na~te-不定詞 ~するために/せずに/代わりに/によって/前に/後で)。ド um~zu-不定詞はルター (Martin Luther 1483~1546) 以降, ド (an)statt~zu-不定詞は17世紀半ば, ド ohne~zu-不定詞は18世紀初頭以降に, それぞれ例証される (Dal/Eroms 2014<sup>4</sup>: 121f.)。いずれも *zu* が前置詞的性格を失った後に起こった。

一般に動詞や形容詞の目的語, つまり語彙的主要部 (lexical head) の補部 (complement) としてはたらく前置詞句では, 前置詞に語彙の意味が希薄である。英語を除く西ゲルマン語では, 後置詞句に似た「ド da(r)/オ er+前置詞」の語順で *zu/te*-不定詞句の内容を照応的に表す。ド da(r)/オ er は場所の副詞「そこ」ではなく, 「それ」の意味であり, -r が目印の「R-代名詞」(R-pronoun) である (清水 2019b: 198-204)。ド *hierbei/warum*, オ *hierbij/waarom* 「これにより/何ゆえに」もそうで, 英 *hereby/therefore* 「これにより/それゆえに」も同類である。

- (21) ド Ich freue mich *darauf*, [dich *wiederzusehen*]. 私は君とまた会うのを楽しみしている (← sich freuen 楽しみにする+前置詞句 *darauf* それを~wiederzusehen 再会すること)
- オ Ik kijk *ernaar* uit [(om) je *weer te zien*]. 同上 (← uitkijken 楽しみにする+前置詞句 *ernaar* それを~weer te zien 再会すること, om は補文標識)

一方, 北ゲルマン語では, 副詞成分・目的語ともに前置詞が直接, 不定詞句を支配して, 「前置詞 (P) + [að/att/at/â-不定詞句]」となり, 前置詞句 (PP) を形成する<sup>12</sup>。Holmberg/Platzack (2005: 423) は大陸北ゲルマン語の統語的

特徴の1つとして、任意の前置詞が不定詞句 (IP) と従属文 (CP) を支配する点を挙げている。イエスペルセンも『文法の原理』(*The Philosophy of Grammar* 1965 (1924): 32) の中で、すでにこの事実を指摘していた。なお、北ゲルマン語では、次例のスウェーデン語のように、(22)①不定詞標識 att (<古ノ at, ス åt/英 at) と (22)②従属接続詞 (補文標識) att (<古ノ þat, ド dass/英 that) が同形である。

- (22) ス ① [[*efter*]<sub>P</sub> [*att* ha öppnat brevet]<sub>IP</sub>]<sub>PP</sub> 手紙を (brevet) 開けた (att (ト zu/英 to) ha öppnat 完了不定詞← öppna 開ける) 後で (efter 前置詞) (Holmberg/Platzack 2005: 423 変更)
- ② [[*efter*]<sub>P</sub> [*att* hon hade öppnat brevet]<sub>CP</sub>]<sub>PP</sub> 彼女が<sup>s</sup> (hon) 手紙を開けた (att (ト dass/英 that) ~hade öppnat 従属文・過去完了) 後で (efter 前置詞) (ib. 423 変更)

北欧語研究の草分けだった森田貞雄 (1928~2011) は、『デンマーク語文法入門』(1971 (1959): 86f.) でこの点を次のように見事に解説している。

- (23) デ ① Jeg tænker *på* [*at komme igen*]. 私は (jeg) また (igen) 来ようと (at komme) 思っている (tænker på, 英 think of) (ib. 87)
- ② Jeg er bange *for* [*at hun er syg*]. 私は彼女が<sup>s</sup> (hun) 病気か (er syg) と (at, 英 that) 心配だ (er bange for, 英 am afraid of) (ib. 87 変更)
- (24) デ Ingenting kan sammenlignes *med* [*{det/Ø} at danse*]. ダンスをすること ((det/Ø) at danse, ド (es/Ø) zu tanzen, 英 (it/Ø) to dance) とは (med) 何も比べものにならない (ingenting kan sam-

<sup>12</sup> 北ゲルマン語にも、ス *därför* att-従属文「~だから」のように、「[R-代名詞 (ス där, ド da(r)) + 前置詞] + att (補文標識)-従属文」などの R-代名詞を用いた構文はある。

menlignes)

(ib. 87 変更)

- (25) デ ① *Det* er en vanskelig sag [*at lære grammatik*]. 文法を (grammatik) 勉強することは (det~at lære, ド es~zu lernen/英 it~to learn), むずかしいこと (en vanskelig sag) である (er)
- ② [*Det at lære*] grammatik er en vanskelig sag. 同上 (det at lære) (ib. 86)

元来, (23) 「前置詞+at (ド zu/dass, 英 to/that)+①不定詞/②従属文」の不定詞標識/補文標識 at の前には, (24) のように指示代名詞単数中性形 det 「それ」(ド es/英 it) があり, at-不定詞や at-従属文と同格で, 前置詞が det を支配していたが, 後に det が脱落したというのである<sup>13</sup>。(24) の det を伴う med det at danse 「ダンスをすること」とは, at-不定詞を強調する場合に使われることがある。また, デンマーク語では, 前置詞がなくても (25) ① det~at lære と並んで, (25)② det at lære のように det と at-不定詞が隣接できるが, ドイツ語 (es~zu lernen) や英語 (it~to learn) ではかならず分離する。以上が森田 (1971 (1959): 86f.) による解説である。

なお, (20) のアイスランド語でも, ア Maður verður að borða *til* {Ø/þess} að lifa. 「生きるためには食べなければならない」のように, 属格支配の前置詞 til が支配する þess (ド dessen, ア það (デ det/ド das) の属格) を挿入できる。これは (22)②のスウェーデン語の従属文でも同様である (ス *efter* {Ø/*det*} att hon hade öppnat brevet 彼女が手紙を開けた後で)。Svensk ordbok A-L (2009: 624) の注にあるように, 本来, 正式な表現は, ス efter

<sup>13</sup> 森田 (1971 (1959): 87) は次の例を挙げている: 古ノ Peir urðu á þat sáttir at kjósa Einar til erkibyskups. 「彼らはエイナルを大司教として, えらぶことに同意した」。そして, 「この場合代名詞 (筆者注: 古ノ þat, ド das/英 that) を省くことができた」として, 次の例を加えている: 古ノ Er tími til at ganga á fund konungs. 「王にあいに行く時だ」(筆者注: til at ganga は til þess at ganga の指示代名詞中性単数属格形 þess (ド dessen) の省略)。

det att-従属文「～した後で」である。指示代名詞中性単数形 det (デ det/ア það) を省いたス efter att-従属文「～した後で」は、長い間、正しくないとして批判され、受け入れられなかった。しかし、現在では正式な書き言葉でも認められている。同書では、次の例文が挙げられている。これは、従属文での完了の助動詞 hade (←ス ha, ド haben/英 have) の省略(ス Ø hållit ← *hade* hållit, ド gehalten Ø ← gehalten *hatte*) を伴う公式の書き言葉的な用例である<sup>14</sup>。

- (26) ス *efter att* ordföranden hållit ett kort tal vidtog prisutdelningen. 司会者が<sup>s</sup> (ordföranden) 短い演説を (ett kort tal) 行った (hållit) 後に (efter att) 授賞式が<sup>s</sup> (prisutdelningen) 挙行された (vidtog)  
(*Svensk ordbok A-L* 2009: 624)

#### 5-4. 西フリジア語の第2不定詞とスイスドイツ語の zum+不定詞句

フリジア語群には、不定詞が2種類ある<sup>15</sup>。西フリジア語を例に取って(27)に示すように、以前の不定詞を受け継ぐ第1不定詞(-e/-je<古フ-a)に対して、第2不定詞は動名詞の与格形(-en/-jen<古フ-an(d)e/-en(d)e)と現在分詞(-en/-jen<古フ-an(d)-/-en(d)-)に由来する(gean「行く」(オ gaan/ド gehen<中高ド gān/gēn) など一部の動詞は、ともに-n)。

第1不定詞は(28)のように、話法の助動詞、使役・許容の助動詞 litte (ド lassen/英 let) と用いる。一方、第2不定詞は(29)のように、知覚の助動詞、姿勢動詞+bliuwe「～したままでいる」/gean「～の姿勢になる」など、古くは現在分詞を伴った助動詞と使う。

さらに、(30)に示すように、名詞用法「～すること」では第1不定詞は目

<sup>14</sup> スウェーデン語では、ルター聖書の影響で18世紀に完了の助動詞 ha を従属文で省略する傾向が急増し、同世紀半ばにピークを迎えた。今でも、官庁語を始めとする書き言葉では省略することがある (Wessén 1968<sup>3</sup>: 114, 122)。

<sup>15</sup> 西フリジア語や北フリジア語モーリング方言には不定詞が3種類あるが、説明は割愛する (Walker/Wilts 2001: 295f, 清水 2006: 631-633, 1992: 114-116)。

的語を伴うが、定冠詞はつかない。名詞的性質が強い第2不定詞は目的語を伴わないが、定冠詞はつく。ただし、(31)に示すように、「限定詞+目的語+第2不定詞句」、または「限定詞+第2不定詞+[fan ~の (ド von/英 of) +名詞句]」のように体言化 (nominalization) すれば可能である。

- (27) 西7 第1不定詞：komme 来る/útfanhûzje 外泊する/smoke 喫煙する  
 第2不定詞：kommen/útfanhûzjen/smoken  
 (清水 2006: 631-702)
- (28) 西7 Hy {wol/lit se} **komme**. 彼は (hy) {来たがっている/彼女を (se) 来させる} (komme 来る, 第1不定詞 -e)
- (29) 西7 Ik {bliuw/gear} {steane/sitten/lizzen}. 私は {立った/すわった/横になったままにいる (bliuw)} / {立ち上がる/すわる/横になる (gear)} (steane/sitten/lizzen 立っている/すわっている/横になっている, 第2不定詞 -(e)n)  
 Ik {sjoch/hear} him **kommen**. 私には彼が来るのが {見える/聞こえる} (kommen 来る, 第2不定詞 -en)
- (30) 西7 {**Útfanhûzje/Útfanhûzjen/\*It útfanhûzje/It útfanhûzjen**} is neat foar my. 外泊は (it 定冠詞) 私には (foar my) 向いていない (is neat) (útfanhûzje/útfanhûzjen 外泊する, 第1/第2不定詞 -e/-en)
- (31) 西7 {**Stoefe segaren smoke/\*Stoefe segaren smoken/Dat stoefe segaren smoken/Dat smoken fan stoefe segaren**} is ferkeard. (あの dat) [強い葉巻 (stoefe segaren) {を吸うこと/の喫煙}] は良くない (間違っている is ferkeard) (smoke/smoken 喫煙する, 第1/第2不定詞 -e/-en)

te-第2不定詞には他動詞の目的語など種々の用法があるが、注意を要するのは次の用例である。「食事に(行く)」は、ド zum Essen (= [前置詞 zu + 定冠詞 dem の融合形] + 不定詞の名詞化) に対して、西7 te iten (= 不定詞標

識 te + 第 2 不定詞) となる。ドイツ語では, Ich will nach Ginza *essen gehen*. 「私は銀座に食事に行きたい」とも言えるが, \*Ich will nach Ginza *zu essen gehen*. は不可である。西フリジア語の不定詞標識 te は, 前置詞「～のために」の目的の意味を濃厚に保っているのである。

- (32) 西フ Ik wol nei Ginza ta *gean te iten*. 私は銀座に食事に行きたい  
 ド Ich will nach Ginza {*zum Essen gehen/gehen zum Essen*}. 同上

スイスドイツ語チューリヒ方言の zum + 不定詞句「～するために」もユニークである (熊坂 2011: 129-154)。動詞句の性質を保つ不定詞句を導くこの zum の -m は, 定冠詞 dem の融合形ではなく, 前置詞 zu は -m とともに前置詞 zum に再分析されており, 目的「～するために」(ド um) の意味を表す。しかも, 末尾の不定詞 gaa 「入る」/lääse 「読む」には不定詞標識 z (ド zu) が欠けている。

- (33) フ S isch na z früe [*zum is Bett gaa*]. [寝床に (is Bett) 入る (gaa) には (zum)] まだ (na) 早すぎる (s isch ~ z früe)  
 (Weber 1987<sup>3</sup>: 244)  
 I hä nüd emaal der Zyt [*zum d Zytig lääse*]. 私は (i) [新聞を (d Zytig) 読む (lääse) ための (zum)] 時間 (der Zyt) さえない (hä nüd emaal)  
 (ib. 244)

これは「zu-~z-」の重複を嫌った結果とも考えられる。事実, Schallert (2013: 124) によれば, オーストリア領の西端に位置し, オーストリアでは例外的にアレマン方言に属するフォアアルベルク (ド Vorarlberg) 方言では, 次例のように不定詞標識 z (ド zu) を補うことがある。

- (34) フ I bruuch s Auto, [*zum d Lena ufa Bahnhof (z) tua*]. 私は (i) レーナを (d Lena) 駅に (ufa Bahnhof) 送る ((z) tua) ために (zum)



車が (s Auto) 必要だ (bruuch) (Schallert 2013: 124)

↓ Ich brauche das Auto, [*um* Lena zum Bahnhof *zu* bringen]. 同上  
(ib. 124)

## 6. 不定形の混交

### 6-1. 現在分詞と不定詞の混交—不定詞+werden, 姿勢動詞+bleiben

現代ゲルマン諸語の動詞不定形の中で、現在分詞は影が薄く、助動詞と使う例もわずかである。古くは「ド sein/werden (少数例) の古形+現在分詞」で継続「～している」/開始「～し始める」を表したが、現在では廃れている。現代語で生産的なのは、接尾辞 -ing に鞍替えした英語の進行形「be+現在分詞」だけである。そもそもドイツ語の不定詞 -en と現在分詞 -end を隔てる壁は、-d の有無による紙一重の差にすぎない。両者が -en になった低地ドイツ語北低地ザクセン方言では、現在分詞は名詞修飾語(ザ *kaken* Water 熱湯←*kaken* 沸騰する, ド *kochendes* Wasser ← *kochen*) 以外の用法は稀で、分詞構文もない (Thies 2011<sup>2</sup>: 303, 330f.)。これに対して、英語の現在分詞 -ing は不定詞に対してアスペクトの対立を生み、進行形や知覚動詞構文でも用いるように、例外的に重要な役割を果たしている。

推量「～だろう」の意味を基本とするドイツ語の「不定詞 -en + werden (厳密には定形 *wird*)」も、中高ドイツ語期までは、「現在分詞 -end (<中高ド -ende) + werden」の形式で「起動(始動)アスペクト」(inchoative/ingressive aspect) の表現だった (-en<-ene<-enne<-ende)。以前は、中高ド *als schiere als ez wart tagende* 「夜が明け (*tagende* ← *tagen*) 始めるや否や」(過去形 *wart* は *wurde* の古形, *Tristan* 5507 行) のように、過去形でも使った。しかし、現代語では、ド *Er wird wohl krank sein*. 「彼はたぶん病気だろう」に対して、\**Er wurde wohl krank sein*. / \**krank sein (zu) werden* は許されない。日本語でも「\*病気だろうだった」/「\*病気だろうこと」は不自然である。ド *Er kann nicht krank sein*. 「彼は病気であるはずがない」に対して、\**Er konnte nicht krank sein*. / \**nicht krank sein (zu) können* が不可で

あるのと同様である。werden は話法の助動詞に変わったのである。ド Er {*wird/kann*} krank gewesen sein. 「彼は病気だった {だろう/かもしれない}」が過去の出来事を表すように、werden は「未来の助動詞」とは言えない。

また、ド {*stehen/sitzen/liegen*} bleiben 「{立った/すわった/横になった}ままている」という「姿勢動詞」(posture verb) を用いた表現も、その意味からわかるように、古くは現在分詞だった。西フリジア語もそうである (5-4 冒頭の第 2 不定詞の説明を参照)。一方、大陸北ゲルマン語は今でも「ス・ブ・ニユ bli/デ blive+現在分詞」と表現する (ス bli {*stående/sittande/liggande*} 同上←不定詞 stå/sitta/ligga 立っている/すわっている/横になっている)。

## 6-2. 過去分詞と不定詞の混交 (1) 一代替過去分詞

以上は現在分詞と不定詞が歴史言語学的に混交した例だが、類例は過去分詞と不定詞についても認められる。「鳥は飛んで来た」を意味する次の 2 例を見てみよう。

- (35) ① ド Der Vogel *kam geflogen*. (過去分詞 geflogen ←不定詞 fliegen 飛ぶ)  
 ② 西7 De fûgel *kaam oanfleanen*. (第 2 不定詞 oanfleanen ← oanfleane 飛来する, ド anfliegen)

(35)①の過去分詞 geflogen は、②西7 oanfleanen (第 2 不定詞) のように、かつては不定詞だった。不定詞 fliegen と過去分詞 geflogen は語形が違うが、典型的な「運動の動詞」(verb of motion) である gehen/fahren/laufen 「行く/乗り物で行く/歩く」は、古高ドイツ語では gangen (gân の異形)/faran/loufan が不定詞で、過去分詞は *gigangan/gifaran/giloufan* となり、「gi-不定詞」(>中高ド ge-不定詞) と同形だった。以前は不定詞にも接頭辞 ge-がついたのである。中高ドイツ語になると、「過去分詞<ge-不定詞」という類推から、他の運動の動詞にも広まった (Hirao 1965)。接頭辞 ge- は元来、

完了アスペクトを表し、到着を示す kommen 「来る」と相性が良かったのである。今では、「不定詞+gehen」(ド {einkaufen/spazieren} gehen {買い物/散歩} に行く)を多用するが、以前は kommen などにも用いて目的・結果・付帯状況を表した。なお、(35)②西フ *oan*flenan 「飛来する」(ド *an*fliegen)の不変化詞 oan-(ド an-)は接近の意味で、動作の完了を表す。fleanen だけでは物足りない(清水 2006: 653f.)<sup>16</sup>。

(35)②のド geflogen は、過去分詞が不定詞を代替する「代替過去分詞」(ド Ersatzpartizip, PPI=ラ participium pro infinitivo)の例である。このように、不定詞を過去分詞で代替する現象を「PPI-効果」(PPI-effect)と言う。

なお、接頭辞 ge-を欠く北ゲルマン語は、現在分詞による様態表現「～しながら来た」を用いる(ス Fågeln *kom flygande*./デ Fuglen *kom flyvende*。同上(現在分詞 flygande/flyvende ← flyga/flyve)。

### 6-3. 過去分詞と不定詞の混交 (2) 一代替不定詞

一方、ドイツ語やオランダ語の完了形では、過去分詞を不定詞で代替する「代替不定詞」(ド Ersatzinfinitiv, IPP=ラ infinitivus pro participio)が見られる。(36)①, (37)①に示すこの現象を「IPP-効果」(IPP-effect)と呼んでいる。

- (36) ド ① Sie *hat* {schwimmen *können*/ihn schwimmen *lassen*/ihn schwimmen *sehen*}. 彼女は {泳げた/彼を泳がせた/彼が泳ぐのを見た} (können/lassen/sehen 代替不定詞)
- ② Sie *hat* {es *gekonnt*/ihn in Ruhe *gelassen*/ihn *gesehen*}. 彼女は {それができた/彼をそっとしておいた/彼を見た} (gekonnt/gelassen/gesehen 過去分詞)

<sup>16</sup> ドイツ語にも、西フリジア語の oan-に対応する不変化詞 an-を用いる表現がある：ド Jetzt *kam* er {*angetobt/angedampft*}. 「今、彼は {騒ぎながらやって来た/息せき切ってやって来た} (← antoben/andampfen, Latzel 1977: 74)。

- (37) オ ① Zij **heeft** {**kunnen** zwemmen/hem **laten** zwemmen/hem **zien** zwemmen}. 同上 (kunnen/laten/zien 代替不定詞)  
 ② Zij **heeft** {het **gekund**/hem met rust **gelaten**/hem **gezien**}. 同上 (gekund/gelaten/gezien 過去分詞)

「ge-不定詞」が普通だった13世紀から例証される代替不定詞の発端は、使役・許容の助動詞：中高ド *lāzen/lān* 「～させる、～のままにする」の過去分詞だったとされている。過去分詞としては、*gelān* 以外に接頭辞 *ge-* を欠く *lān* が多用されたために、不定詞に隣接するとこの過去分詞が不定詞に再分析されて、過去分詞と不定詞の語幹が同形の他の助動詞に広がった。これには次の階層がある。ドイツ語は受益動詞まで、オランダ語では上記の階層のすべて代替不定詞が可能である (Fleischer 2011: 175-193)。

- (38) 使役・許容の助動詞 > 話法の助動詞 > 知覚の助動詞 > 受益動詞 (ド *Benefaktive*, *helfen/lernen* ～するのを助ける/教える) > 継続動詞 (ド *bleiben/sitzen* ～したままにいる) > 起動/終結動詞 (ド *anfangen/aufhören* ～し始める/～し終わる) > 制御動詞 (ド *versuchen/sich trauen* ～しようとする/あえて～する)

一方、スイスドイツ語の話法の助動詞は過去分詞が不定詞とつねに同形で、不定詞がなくても代替不定詞が現れる ((39))。逆に、過去分詞が *ge-* を欠く西フリジア語には代替不定詞がなく、規則正しく過去分詞を使う ((40))。

- (39) フ1 Er **hät** {**chöne choo**/**s chöne**}. 彼は {来られた (来ることが (choo) できた (hät chöne))/それが (s) できた (hät~chöne)} (代替不定詞/過去分詞 *chöne*)  
 (40) 西7 Sy **hat** {komme **kinnen**/him komme **litten**/him kommen **sjoen**}. 彼女は {来られた/彼を (him) 来させた/彼が来るのを見た} (過去分詞 *kinnen/litten/sjoen* ↔ 第1不定詞 *kinne* 来る/*litte* ～させる

/sjen 見る)

Sy *hat* [it *kinnen*/him mei rêst *litten*/him *sjoen*]. 彼女はそれが (it) できた/彼をそっと (mei rêst) しておいた/彼を見た (過去分詞 *kinnen*/*litten*/*sjoen*)

以上のように、現代ゲルマン諸語のいくつかの構文では、不定詞、過去分詞、現在分詞の混在が観察される。

## 参考文献

- Adams, Jonathan/Petersen, Hjalmar P. (2009<sup>2</sup>) *Faroese. A Language Course for Beginners. Textbook*. Tórshavn: Stíðin.
- Bech, Gunnar (1983<sup>2</sup> (1955/57)) *Studien über das deutsche Verbum infinitum*. Tübingen: Niemeyer.
- Dal, Ingerid/Eroms, Werner (2014<sup>1</sup>) *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage*. Berlin/Boston: De Gruyter.
- Der Sprach-Brockhaus. Deutsches Bildwörterbuch* (1974<sup>8</sup>) Wiesbaden: Brockhaus.
- Duden (2009<sup>8</sup>) *Die Grammatik*. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.
- Fleischer, Jürg (2011) *Historische Syntax des Deutschen*. Tübingen: Narr.
- Fulk, R. D. (2018) *A Comparative Grammar of the Early Germanic Languages*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Hirao, Kozo (1965) Fügungen des Typs *kam gefahren* im Deutschen. *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 87. 204-226.
- Holmberg, Anders/Platzack, Christer (2005) The Scandinavian Languages. In: Cinque, Guglielmo/Kayne, Richard S. (eds.) *The Oxford Handbook of Comparative Syntax*. Oxford/New York/Tokyo: Oxford University Press. 420-458.
- 保坂道雄 (2014) 『文法化する英語』 開拓社
- Hultman, Tor G. (2003) *Svenska Akademiens språklära*. Stockholm: Svenska Akademien.
- Jespersen, Otto (1965 (1924)) *The Philosophy of Grammar*. New York: Norton.
- 熊坂 亮 (2011) 『スイスドイツ語—言語構造と社会的地位』 北海道大学出版会
- Latzel, Sigbert (1977) *Die deutschen Tempora Perfekt und Präteritum*. München: Hueber.
- Lockwood, W. B. (1968) *Historical German Syntax*. Oxford: Clarendon Press.
- 森田貞雄 (1971 (1959)) 『デンマーク語文法入門』 大学書林
- Moen, Per/Pedersen, Per-Bjørn (1998) *Engelsk-norsk/Norsk-engelsk ordbok*. Oslo: Det

- Norske Samlaget.
- Mustanoja, Tauno F. (1960) *A Middle English Syntax*. Helsinki: Soci t  N ophilologique.
- 中尾俊夫 (1983<sup>2</sup>) 『英語発達史』 篠崎書店
- 中尾俊夫/児馬 修 (1990) 『歴史的にさぐる現代の英文法』 大修館書店
- 尾崎 義 (1955) 『スウェーデン語四週間』 大学書林
- Pafel, J rger (2011) *Einf hrung in die Syntax*. Weimar: Metzler.
- Schallert, Oliver (2013) Infinitivprominenz in deutschen Dialekten. In: Abraham, Werner/Leiss, Elisabeth (Hrsg.) *Dialektologie in neuem Gewand*. Hamburg: Buske. 103-140.
- 清水 誠 (1992) 「北フリジア語モーリング方言 (1). 文法. V. Tams J rgensen: *Kort spr keliir foon d t mooringer frasch* 訳注」『北海道大学文学部紀要』40-3. 65-162.
- 清水 誠 (2006) 『西フリジア語文法—現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』北海道大学出版会
- 清水 誠 (2009) 『北欧アイスランド文学の歩み—白夜と氷河の国の六世紀』現代図書
- 清水 誠 (2010) 「オランダ語研究の歴史と言語規範の形成」北海道大学大学院文学研究科言語情報学講座編『言語研究の諸相—研究の最前線』北海道大学出版会 183-252.
- 清水 誠 (2019a) 「ドイツ語から見たゲルマン語一名詞の性、格の階層と文法関係」『北海道大学文学研究院紀要』158. 37-76.
- 清水 誠 (2019b) 『オランダ語の基本』三修社
- 清水 誠 (2020) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (2) —属格と所有表現」『北海道大学文学研究院紀要』160. 37-96.
- 清水 誠 (2021a) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (3) —名詞の性の発達と複数形の形成」『北海道大学文学研究院紀要』162. 35-101.
- 清水 誠 (2021b) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (4) —冠詞と指示詞」『北海道大学文学研究院紀要』163. 1-22.
- 清水 誠 (2021c) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (5) —人称代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』164. 19-41.
- 清水 誠 (2021d) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (6) —3人称代名詞、再帰代名詞、所有代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』165. 31-60.
- 清水 誠 (2022) 「ドイツ語から見たゲルマン語 (7) —2人称代名詞と関連表現」『北海道大学文学研究院紀要』166. 1-27.
- Svensk ordbok A-L (utgiven av Svenska Akademien)* (2009) Stockholm: Norstedts.
- Thies, Heinrich (2011<sup>2</sup>) *Plattdeutsche Grammatik*. Neum nster: Wachholtz.
- Thr nsson, H skuldur/Petersen, Hjalmar P./Jacobsen, J gvan   Lon/Hansen, Zakaris Svabo (2004) *Faroese. An Overview and Reference Grammar*. T rshavn: F roya Fr dskaparfelag.
- Walker, Alastair G. H./Wilts, Ommo (2001) Die nordfriesischen Mundarten. In: Munske,

北大文学研究院紀要

Horst Haider (Hrsg.) *Handbuch des Friesischen/Handbook of Frisian Studies*.  
Tübingen: Niemeyer. 284-304.

Weber, Albert (1987<sup>3</sup>) *Zürichdeutsche Grammatik*. Zürich: Verlag Hans Rohr.

Wessén, Elias (1968<sup>9</sup>) *De nordiska språken*. Stockholm: Almqvist & Wiksell.